



# アーカイブ 通信 No.32

No.32

2024.11.1

◆編集・発行：

ネットワーク・市民アーカイブ

事務局

〒189-0012 東京都東村山市萩山町 2-6-10-1F

tel・fax：042-396-2430

E-mail：info@archive-tama.sakura.ne.jp

◆正会員1口6,000円、賛助会員1口3,000円/年

ゆうちょ銀行 振替口座 00120-9-729226

口座名：市民アーカイブ ※団体会員2口～

6月16日、立川市たましんりス  
ルホールで、市民アーカイブ多摩  
開館10周年記念として、森まゆみ  
さんの講演会を開催しました。  
地域雑誌『谷根千』（1984、2009年  
発行）や懐かしい写真の紹介も交  
えながら、雑誌の歴史・変化・運  
動、地域を記録していく意味など  
についてお話しいただきました。

## 地域雑誌『谷根千』創刊の頃

雑誌創刊は、最初の子ども  
が2歳前後になって活発に歩  
き出し、一緒に街を散歩して  
いた頃です。



当初は、本の索引を作った  
り、翻訳などをしながら子育て  
をしていました。子どもと一  
緒に街を歩くと、普段は行か  
ない路地に入っっていたりす  
る。こんなところにこんな場  
所があるんだ、ということにた  
くさん気がつくようになり、  
街のことを調べ始めました。  
あまり有名ではない小さな街  
のことは資料や紹介が少なく  
て、当時は「谷根千」（谷中・根

津・千駄木）という言葉もあり  
ませんでしたが、今でも谷中と  
いう駅はなく、バス停しかあり  
ません。古くからの方は谷中  
生姜のことは知っていても、谷  
中という地名はあまり知られ  
ていませんでした。

最初は街のことを調べなが  
ら、小説や写真集でも出そう  
とか考えていたのです。けれ  
どうまくいかず、たまたま一  
緒に街を歩いていた保育園の  
友人と私の妹の3人で地域雑  
誌を始めました。

## 銭湯・酒屋・文学と地域：

2号（84年12月）は冬の発行  
なので銭湯特集にしました。

手に取った人に捨てられない  
雑誌にするため、連載ではな  
く特集方式にし、これを読め  
ば谷根千の銭湯が全て分かる  
ことを目指しました。銭湯を  
巡って生業の苦勞を聞く。調  
査シートを作って質問する。

## 「聞き書き」を始める

もう1つ、地域の歴史を調  
べて気づいたのは、活字化さ

市民アーカイブ多摩 開館10周年記念講演会 報告

地域雑誌『谷根千』とその後  
～厄介な「時代」をどう記録するか～

やねせん  
お話：森まゆみさん  
(作家、編集者、「谷根千」記憶の蔵「主宰」)

シリーズ“現場”を訪ねる⑩  
「場所のもつ力」から学ぶ  
～横浜・寿町関係資料室を訪ねて～

- 2024年12月8日(日)  
12:30(集合)～16:00頃
- 集合：石川町駅北口改札外  
(JR京浜東北線・根岸線)
- 訪問先：寿町関係資料室(こ  
とぶき共同診療所内)、寿生  
活館ほか
- 案内人：松本一郎さん(寿町  
関係資料室・大正大学)
- 資料代：500円
- 定員：15人(申込先着順)

【申込み】  
ネットワーク・市民アーカイブ  
tel・fax：042-396-2430  
E-mail：info@archive-tama.  
sakura.ne.jp

れたものが少ないということですが。記録が無いと事実が無いことになってしまいます。地域に昔からいる人に原稿を依頼したのですが、まったく書いてくれません。仕方なく私たちが向いて、地図などを用意しながら聞き書きを始めました。

当時は、聞き書きなんて歴史学の方法じゃないという見方もまだありました。「文書になって残っていないと歴史ではない」とも言われました。それでは偉い男の人の歴史しか残りません。労働者とか農民とか漁民とか、被差別の人たちとか、女とか子どもとか、病気を抱えている人はほとんど無視されてしまいます。上野近くの狭い路地の住宅地には、東北から出てきた労働者家族が集まって住んでいました。

### 地域を記録しながら残す

ただ、最初はうまくいきませんでした。やがて、地域には地域の年表があり、地域の地図を持っていかないとだめだ、ということに気がついていきます。

たとえば、私たちの地域には「黒豹事件」という有名な事件があります。戦前に上野動物園の黒豹が逃げ、街中が恐怖におののいたという事件です。また、根津に渡辺銀行の本拠があったので、地域の人は皆ここに預金をしていました。しかし取り付け騒ぎが起き、連鎖倒産で恐慌に



つながったということもあり、それも特集にしました。

また、地域のランドマークでもある谷中五重塔は幸田露伴の小説の題材にもなっています。57(昭和32)年7月6日に放火心中で焼けてしまいました。そういう多くの人が印象深く思っている場所や施設の特集もしました。

そのうちトヨタ財団の助成を得ることができたので、東京藝術大学と東京大学の学生さんと路地と長屋を残すためにはどうし

たらよいか、という研究も行いました。路地とか長屋というと貧乏の象徴みたいに見られるので、そう言ってほしくない、という人もいました。でも、路地や長屋に置いてあるものや、植えてあるものから、そこで暮らす人の暮らしがぶりが見えてきます。みんながどこに集まっているのか、街の縁側といえますか、街ののりしろのような場所を探して、街の新しいコミュニティを作ろうという活動もやってきました。

### バブルで大きく変わっていく

以上が『谷根千』の第1フェーズです。楽しくやっていたのですが、86年頃からバブルの時代になりました。地域にも地価高騰の波が押し寄せ、マンションの建設でお店をやめてしまう人も増え、土地を売って郊外に引越す人もいました。

それからというもの、焦るようになっていることを地域でやりました。この地域では空襲で亡くなった人も多く、平和地蔵とあったものがありました。地域の学校と協力しながら、戦争遺跡を調べる活動も行いました。ただ、初期の頃は空襲を思い出したくないという人も多かったです。

『谷根千』でも36号(93年)で学童疎開の特集をしたのですが、空襲の特集ができたのはようやく80号(05年)。関東大震災の特集は24号(90年)でした。

聞き書きの記録がたくさんあったので、昨年『聞き書き・関東大震災』という本をまとめました。また、地域にあった銭湯が廃業したので、その跡をギャラリーにする活動もしました。銭湯なので、パウハウスならぬ「バスハウス」という名前です。

### 見えにくい地下開発による問題

いろいろな活動もしました。大きなものとしては、不忍池の地下に駐車場ができるという話が出た際には、さまざまな反対運動を繰り広げました。単に守るだけでなく、水質調査も実施。『谷根千』16号(88年)の井戸の特集は、昔の井戸を懐かしむといった内容でしたが、今度は井戸があることは私たちの生活にとつてどんなに重要かということを考えました。井戸を持つ人のつながりを作って使えるようにしたのに新幹線でトンネルを掘ったため、地下水の水位が下がってしまいました。その頃、大深度地下開発が問題になり始めていました。地下に建造物をつくと、地下水を切ってしまうことにもなります。日本橋には美観のために高速道路を地下化する計画があります。道路が地上に出ていると、いつか壊すことができますが、地下化すれば、そうはいきません。

自然は復元も可能なので、あまり悲観しすぎないことも大切だということを学びました。結局、池の下には駐車場はできず、別の場所にできました。ただ、本当は駐車場自体が必要な場所です。上野には車では来ないようにしようというキャンペーンをやればいわけです。

### 公園・近代建造物保存運動

12年前には、ザハ・ハデイド設計の国立競技場建設について建築家の槇文彦さんらと反対運動をやりました。その後も、神宮外苑や日比谷公園で再開発が進められています。日比谷公園は、日本で最初の洋風庭園で、歴史的価値があります。

再開発は上野公園です。すでに完成しています。灌木を切り、真ん中の噴水を縮小してイベント広場を作ったのです。地域にとつて意味はありませんが、緑は憩うためにあるだけでなく、都市を冷やすためにあります。

近代建造物の保存活動も行ってきました。1890(明治23)年にできた東京音楽学校楽堂も壊されることになっていました。東京藝大の先生、学生、そして市民の運動で残すことができました。壊すと言っていたのに、いざ残ると今度は重要文化財に指定されました。

東京駅の丸の内駅舎も運動で残し、これも残ると重要文化財に指定されました。JRは壊す

と言っていたのに、いざ残るとそれを宣伝しています。

## 次の時代に希望を見据えて

大きなものは残ることがありますが、身近な小さなものは壊されていってしまいます。75年に来た重要伝統的建造物群保存地区という街並み保存の制度は、一定の地区を面として保存しようと、全国で百か所以上が指定されています。それだけでは不十分で、単体の建物を残す制度を作ってほしいと言ってきました。そして96年に作られたのが、登録有形文化財(建造物)というボトムアップの制度で、市民側からの届出が可能になりました。また、ヘリテージマネージャー(地域歴史文化遺産保全活用推進員)制度ができ、文化財を守る人・主体を作る道筋もできました。

結局建ってしまいました。元の80歳以上の町会長さんが、「富士山はずっとあるが、ビルはいつまでもあるわけではないので、次にビルが壊された後は高いビルが建たないように、今からがんばりましょう」と発言された時には、一同感動しました。

## 建物を上手に残し、活用する

また、近くにある元安田財閥のお屋敷のご当主が亡くなられ、相続が発生することになった時、ご遺族が日本ナショナルトラストに寄付してくださることになりました。そこで、文京建物応援団というNPO法人を作り、指定管理を受けて管理をしています。ボランティアが何十人もいて、そのローテーションを作るのが大変と聞いています。ご遺族の理解を得ることが大切で、屋敷を一緒に守っていくという姿を見ていただくために、掃除道具の雑巾やはたきを作って掃除をしたりしました。入場料500円で見ることができ、案内も受けられますので、ぜひ来てください。特徴は大正時代に建てられたままという点。カーテンやカーペットも元のままです。入場料だけでは維持が大変なので、ロケ地として貸したり、雑誌の撮影などでも利用していただいています。



館、横山大観記念館など、小さなミュージアムをまわるコースができました。いまは観光化が進んでいます。日暮里は成田から便利なので、インバウンド客に知られるようになりました。今の事務所も百年前の蔵なんです。自分たちで直して、いろいろなイベントをやっています。

## 終刊後の活動

2009年に『谷根千』は94号で終刊しました。考えるとこの雑誌はメンバーそれぞれ家族に無理を強いたという反省もあり、雑誌をやめるきっかけとなりました。また、年老い過ぎる前にやめれば、また別のことをできるとも考えたのです。

私は本当はバーのママをやりたいだったので、さすらいのママという形で地域をめぐりながら若い人たちと話す機会を作りたいとも考えました。

もう1つ、94号まで発行してきた『谷根千』を振り返ってみたいかったです。雑誌で取り上げた方がその後どうなったかを紹介するという企画を考え、紀伊國屋書店の『スクリプタ』誌に連載したのですが、季刊ではとても足りません。雑誌というのは出しっぱなしで終わってしまうわけではありません。雑誌は終刊すると研究対象、歴史になるのだそうです。幸い、バックナンバーを多くの大学が買ってくれました。

全巻を持っている機関が国外も含め三十数か所あります。今も在庫処理に追われてはいますが、個人的には、50歳のときに目の病気をして視力が弱くなり、パソコンで原稿を書くようになりました。あまり目を使わないで出来る、聞き書きで本を作る仕事も継続しています。「1人の老人がいなくなることは、図書館が1つなくなること」という言葉がありますが、気がついた時には形にできなくなっていました。

## 身近な人の話を聞き、記録する

今は本が売れなくなっています。出してもすぐに絶版になる。ならば本屋さんから本を出さず

に自分で出したらよいと、仲俣暁生さんが言われていますが、軽出版やひとり出版社という言葉が少しづつ知られるようになりました。1年に1冊出して、1500万円の売上をあげる人もいます。読者をネットワークで抱えていけば、比較的手軽に出版ができます。『谷根千』も年間売上げが最大で1500万円というときもありました。経費が半分くらいで、それなりの収入にもなっていました。『谷根千』は昨年、デジタル化をして世界中で売っています。これから秋にかけて、ばら売りも始まります。そろそろ学童疎開の話も聞くのが難しくなりつつあります。

聞けるうちに、まず身近にいる人のお話を聞いておくことが大切です。このことを申し上げて、終わりたいと思います。ありがとうございます。

## 【質疑応答】

参加者：建物保存は相続の際に難しいのではないのでしょうか。

森：建物に大きな特徴があったり、著名な人が住んでいた場合には自治体が引き受けることがないわけではあります。朝倉彫塑館は区役所が有償で買ったと聞いていますが、ここは以前から公開していた場所でした。予算に限りがあるので、期待はあまりできません。

ナショナルトラストに寄付という選択もありますが、難しい。残念ながら日本には建物を寄付して残す文化がありません。最近ではギャラリーやレストランにして活用する手もありますが、修復に大きなお金がかかります。残念ながら自治体は興味がありません。民間では、(一社)住宅遺産トラストという団体もあります。

現実的には、良い不動産業者に相談して、なるべく壊さない人に売るため見学会を開くという工夫も必要かもしれません。

参加者：地域を知る活動への若者の共鳴はありますか。  
森：活動をしていて一番良かったのは後継者ができたことか

## 段ボール箱の中の資料を手にとって

渡邊康弘(国分寺市在住)



もしれません。稀有なことで、たまたま東大と藝大が近くにあり、大学を卒業しても、関わりをもつてくれる人がいます。建築と不動産の専門家が作った(株)まちあかり舎の活動が参考になるかもしれません。ただ不

動産は高騰していて、最近若い人は山の手線の外側に住むことが多くなっています。

参加者：「谷根千 記憶の蔵」の経営はどうされていますか。森：もとは東大の教授だった方の邸宅で、庭は区に寄付され、

建物は東京在宅看護協和会から借りている形になっています。『谷根千』をやめた直後は収入がある程度ありましたが、それも限られています。本の印刷や建物スペースのシェア仲間を募り、どうにかやりくりし

ています。蔵の1階は地域のシネマの保管スペースとして上映会なども開かれています。参加者：今後残したい場所や事柄はあるでしょうか。森：皆さんそれぞれの場所でアーカイブ化をやっていた

きたいです。私たちのところにも膨大な資料がたまっています。それをどうアーカイブ化していくか。やれることを確実に、無理をせずというのが大切だと感じています。(記録・町村敬志「運営委員」)

### 市民アーカイブとの関わり

家にある段ボール箱の中には、昔のビラやらミニコミやらが……。どうしよう。遺品整理するとき、これってゴミだなあ。

そんなある日、近所の図書館のレターケースから『アーカイブ通信』を手に取りました。そこで、講演会と総会に足を運んでみたのが会との関わりの始まりです。ただ、都合のつくときだけ足を運ぶ自分。しかも、玉川上水の「市民アーカイブ多摩」にすらまだ一度も行けていません。そんな第3列の会員である私に、この原稿の依頼が降ってきたのはなぜなのかしら？

考え込みながら、気がつくまで反対方向行きの電車に乗っていました。分倍河原駅。そうだ、

駅前のビルに以前から気になった書店が。勇気がなくて入れなかったのです。でも、その日はポトっとした勢いのまま、入ってみることにしました。本のラインナップも面白い。なんとミニコミらしきものも。思わず手にしてみる。懐かしい。

### ミニコミをつくる人

四十数年前、自分もミニコミを作っていました。その当時、三多摩の各市に1団体ぐらいの多さで、日韓問題とか朝鮮問題研究会といった団体名を冠するグループが活動していました。私も、そのうちの1つの市民運動体に参加。後に、指紋押捺問題とか外国人登録法といった課題の折にも、各グループは相互に声を掛け合って、各市の市役所の市民課の窓口

に押しかけ、いえ交渉に行ったりしていたのです。そしてまた、各グループはさかんにミニコミ(会報)も作っていました。印刷はもっぱら、市民会館等の印刷機をぐるぐる回して、頒布方法はもちろん郵送です。メールの1斉配信なんてありません。印象的だったのは、

会の集まりなどで人一倍話が長い男の人。顔を見せないんです。になると顔を見せないので、ね、なぜか。なので、市民課で大声をあげたり灰皿を投げたり(当時はなぜか役所の中にけっこう灰皿があったんです)するのは、それが得意な人に任せて、私は会報を作ったり、発送物を手際よく封筒に入れる作業に専念していました。手の運動です。

### ミニコミの「香り」

そんなわけで、編集は好きでした。いろんな人に原稿をお願いしたり、囲みの連載記事を作ったり、割り付けるのも楽しい。それはビラと同人誌を合わせつつ、落書きの香りを振りかけるような感じ。何より、運動が広がりをもつために、ヒトとヒトの関係を編むというふうな活動でした。昨今のネット上の「つぶやき」には、こうした香りはありませんね。

もともと、最近では運動体の会報もデジタルデータで配信されているところが増えてきました。紙のミニコミがなくなることはないとは思いますが、それでも、少なくともいつか変化していくことになるのかもしれません。そうでした、実は、段ボール箱にはほかの資料も入っています。

当時、会の中に、共同保育所をしつつ保育もやっている男の人がいました。その人に背中を押されて、優生保護法(当時)の改悪に反対する女の人の運動(1983年ごろ)のお手伝いに行きました。その男の人、ある人に背中を押されたと言っていました。私は、厚生省(当時)の前で座り込みを続けている女の人たちに物資を運ぶのが仕事。しかも同じ頃、私は「青い芝の会」という障がい者団体の人の介助などもしていたものですから、両方の人からいつも怒られてばかりでした。その当時の資料です。

この原稿を書いている最中、新聞に田中美津さんの訃報が報じられました。私の背中を押した男の人の、その背中を押した、その人です。

段ボール箱の中身、きちんと整理しなくてははいけませんね。(わたなべ・やすひろ「会員」)



第1回 5月25日  
地域を本でつなぐ  
—府中・マルジナリア書店から  
小林えみ(文筆家)



◆コロナ禍に出店

「書店の人」というイメージを持たれているが、出版業が先。短大卒業時は就職氷河期と重なり、就活には苦労したが、本が好きで、なんとか出版社に就職できた。出版界で経験を積み、2020年にひとり出版社の「よはく舎」を起して独立した。翌21年に独立系書店「マルジナリア書店」を開店。近隣に住んでいて、分倍河原に本屋さんになかったことも決め手だった。コロナ禍でのオープンになったが、「おうち時間」の人が多くなったこともあり、来店者は多かった。

ピークに減少を続けていて、書店も減少。書店の取り分は売上の2割程度で、自分の書店で自分がつくった本を売れば7割、さらに自分が書いた本なら8割入る。出版業を組み入れながら経営を成り立たせている。大手出版社はマンガなどの電子書籍の売り上げが大きい、都心にオフィスを構えている中堅出版社は人件費や家賃で厳しいこともあり、「ひとり出版社」は増えている。他に仕事(福祉や農業など)をしながら本を出版している人も多い。私は今、版元ドットコム(中小出版社をサポートする会員制団体)の理事を務めているが、ひとり出版社は増加しているが、ひとり出版社が増加しているので、会員は5年前の300社ぐらいから、600社近くに増えた。

◆書店を通して地域と繋がる

本屋を始めて、地域とのつながりができた。マルジナリア書店では、①著者を招くトークイベント、②テーマ本を決めた読書会、③「読書時間の日」と名づけてノージャンルで参加者が読んだ本を紹介してもらう読書会などのイベントを開催している。夜7時からの開催なので、来られる人は限られるが、地域の人が集まる機会になり、様々な人(作家や研究者、ピアニスト他)との出会いがあり、驚いている。

◆safer spaceとしての書店

社会にはさまざまな不平等や差別があり、より弱者の側の視点を大切にしている。書店の存在がsafer space(安全性に配慮している場所)であることを心がけて選書している。今後はより積極的に差別するような人を減らすことも考えての店づくりをしたい。現在は特にトランスジェンダーや急に制度改定された共同親権問題に関心を持っている。

◆書店からの発信

今、伝えなければならぬ情報を集め、書店から発信したいと思っている。情報源は、N

第2回 6月22日

東北津波被災地を訪ねて  
—私が集めたアーカイブ

吉田明(元神奈川県立高校教員)

2011年以降、私は毎年三陸海岸の津波被災地を訪ねるよ

は、こうした体験をもとにしたものである。

うになった。そして各地で集めた資料(写真・伝承・新聞・書籍)をアーカイブとして活用し、教育現場での防災講話や授業に取り組んだ。今回の報告

市民アーカイブ多摩の四季(18)

初冬 冬芽

冬はゆっくり緑地を散策・観察できるよい季節。葉芽と花芽の区別は難しくそうです。

木々の枝の先や葉の付け根には芽があります。よく見たことがありませんか？



左からコブシ、ウメ、サクラ(ソメイヨシノ)の冬芽、開花しはじめたサクラ。矢印は葉芽、その他は花芽。

落葉樹は冬に葉を落とすので観察のチャンスです。どの冬芽も春になったら枝を伸ばして葉や花をつけ、命の縮図だと見ることが出来ます。一方で、花や実、葉が植物の顔であるように、いろいろな形の冬芽が見られますね。同じ枝の上に、花を咲かせる花芽と、枝葉を伸ばす葉芽をつけるもの

て、ウメの葉芽はその両側に花芽があるのが普通で、花芽から1つずつ花が咲きます。サクラでは枝の先に葉芽がつくことが多く、花芽は互い違いについて、1つの花芽からいくつもの花が咲きます。

(邑田仁二 元東大小石川植物園園長)

◆質疑応答  
会場からは、アーカイブ施設や図書館と「safer space」の関係、マルジナリア書店の来客状況、イベントの頻度、図書館と書店の関係、図書館の指定管理者化について、若者は本離れしているのか、地域の書店だから見えてくること、など活発な質疑応答が行われました。

HKの「ワールドニュース」(BS)や「キャッチ! 世界のトップニュース」など。ガザ、ウクライナ、ミャンマー、スーダンなどの情勢が、各国ではどのように報じられているかが分かる。社会問題だけではなく、朝ドラ「虎に翼」の関連本や、ドラマ化で話題になった「デブ・ヴォイス」の原作や手話の本を置くなど、文化やエンタメも含めて扱う書店でありたい。お勧め本を『マルジナリア通信』に掲載するな

(記・立石昌紀 会員)

### ◆津波の語源から考える

今では国際用語になっている「津波」だが、その語源はやはり三陸海岸を襲う津波にある。海洋学者の三好寿によれば「洋上で津波の発生、伝播に気付かなかった漁船が、夕方漁を終わって津港へ帰ってみると、跡形もなくなくなっており、茫然とするという例が重なって、津の波、津波となったのである」（『津波——その発生から対策まで——』）とある。

津波の語源は、沖合では気づかない波が、突然津（港）を襲ったことを示している。水深5000mの海を進む津波の速さは時速800km、水深500mで250km、水深10mで40km

### リレーエッセイ

〈市民アーカイブ多摩のひとつ〉⑧

## 縁ある場所で

永瀬里子

資料整理  
ボランティア



生まれは山梨県韮崎市。甲州街道沿いだ、小学4年生までは分校の複式学級で育った。小5の夏休みに雨が降り続いて街道に沿って流れる釜



である。水深の浅くなる「津」に近づくとも波は急減速し、後ろの波が前の波に迫り、とてつもない高さを生むわけだ。

### ◆石碑を検証する

『気仙新聞』（12年3月30日）には大船渡市吉浜の「津波石」の話が出ています。重さ30tもあるその石には「昭和8年3月3日ノ津波二際シ打チアゲラレタルモノナリ」と彫ってあったが、その後の道路建設で埋められて

しまった。11年3月11日の午前中に地元にお住いの柵木澤さんは、たまたま友人とその跡地で会い、昔よく遊んだ「津波石」の思い出話をしたところ、その日の午後津波がこの地を襲い、津波石が再び姿を現したという。

『読売新聞』（11年3月20日）には宮古市重茂半島の東端・姉吉地区にある石碑の話が出ています。この地区では1896年と1933年の2回の大津波で、生存者がそれぞれ2人と4人という壊滅的な被害を受けた。その後、姉吉の人々は海拔60mの場所に「高き住居は児孫の和楽。想へ惨禍の大津波。ここより下に家を建てるな」という石

碑を建立した。この戒めを守って高台に家を建てた住民たちは、今回は警報とともに800mの坂道を駆け上がり、1人の犠牲者も出さなかったということだ。

### ◆11年に訪ねた2つの小学校

石巻市立湊小学校の大時計は津波の到達した15時48分で止まっていた。地震発生からおよそ1時間で津波が到達し、1階部分が水に浸かったことがわかる。地震後、心配した保護者が次々に子どもを引き取りに来たが、校長は子どもを保護者に返さず、逆に保護者とともに子どもたちを校舎の3、4階に避難させる選択をした。低地にある周囲の住宅の多くが津波の被害

を受けたが、学校にとどまった人々の命は守られた。

石巻市立大川小学校は追波湾から北上川を4km遡った場所にある。標高は1.2m。地震発生から51分後に津波が襲来するが、なぜか子どもたちがよく登っていたというすぐ裏の山に避難することもなく、校庭待機のまま時間を過ごしてしまう。このため、保護者に引き取られた27名の児童をのぞき、74名の児童と10名の教員が犠牲になった。被災後、遺族に対する石巻市の不適切かつ不誠実な対応が続き、遺族により訴訟が起された。詳しくは「水底を掬う」（21年、信山社）を参照。

（記・吉田明〓会員）

無川が決壊して、濁流が巨大なローラーになって村を飲み込んでいった光景は今も目に焼きついている。

東京に来て最初の赴任地が立川市立幸小学校。当時団地が立て続けにでき、新設校が1気に3校できた。私はそのおかげで就職できた。あろうことか私は赴任最初の日に遅刻という大失態をやらかした。東京に出て来て初めて住んで、通勤に利用したのが一橋学園前駅。当時の西武線は萩山駅で拝島行と多摩湖行に前後

で列車が分離された。私は田舎から出てきたばかりで、そんなこととはつゆ知らず、後ろの多摩湖行の車両に乗りこんでいたのだ。

新設校だったので机や椅子、校庭も整備されておらず、大変だったことを覚えている。山梨とはことばのアクセントが違い、子どもたちに笑われたことはカルチャーショックだった。日常的にSLを利言用しては先輩に呆れられた。

幸小学校は現在も市民アー

カイブ多摩のすぐ南側であり、当時は雑木林で、建物はなかった。50年後に関わることになるうとは予想だにできなかった。知り合いにもらった通信をなげなく見ていたらボランティア募集の記事が目にとまった。近いし、何かに関わりたい気持ちもあり、これなら耳が悪くて宅配のチャイムも聞きとれない私にもできるかもしれないと思って始めてから1年になる。

実際にボランティアを始め驚いたのはミニコミ誌の多

さである。市井の人々が頑張っている様子が伝わってきて心打たれる。『茨木のり子の家を残したい会』というミニコミ誌を見つけたときは嬉しかった。ミニコミの繰り込み作業をしていて、探しているファイルが見つかり、すぐファイルで見つかるときは達成感がある。見つかってもファイルがパンパンで新しくしなければならぬ時はちよつと残念……。教わったことをすぐ忘れるのは大目にみて戴きたい。

（ながせ・さとこ〓会員）

# アーカイブ多摩 目録

## ◆定款・設立趣意書(案)

次年度のNPO法人化を目指して、運営委員会で検討が続いています。会員の皆様にはNPO法人の定款と設立趣意書(案)を同封しました。ご意見・提案や変更した方が良い点など、どうぞ遠慮なくお寄せください。

## ◆千客万来

4〜8月にかけて、学生さんや他地域で資料室などを運営されている方など、当館見学目的の来館が続きました。小さな資料室の何か参考になるのだろうか……と思いつつ、資料の収集方法、分類、使っている消耗品等やデータベース管理方法などなど、具体的な話で盛り上がり、当館にとっても貴重な機会になりました。

## ◆新規・目録作成中

当館所蔵のミニコミ一覧目録を作成中です。2冊目となる今回の目録は、分野別・発行地別・発行団体の五十音順などでも検索できるようにしたいと思っています。「こんな目録がほしい」「うちの会報・通信も入れて」という方はぜひご連絡ください。

## ◆秋の樹林開放日

当館を含む緑地の保全をしているNPO法人グリーンサンクチュアリ悠の樹林開放日が開催されます。太極拳・カフェ・ミニフリーマーケットもあり。紅葉を楽しみにご参加ください。  
12月1日(日) 10〜12時(市民アーカイブ多摩地図参照)

## ◆年末・年始休館日

12月28日(土)、1月1日(水)は休館します。年末最後は12月25日(新年は1月8日)からです。

## 運営委員会など

- 6月16日 2024年度総会(参加者14人)、記念講演会(参加者50人)
- 6月21日 第3回運営委員会、参加者6人。会員カンパ者、当番予定、来館者各部会から報告(以下毎回)。総会・記念講演会感想・反省、通信検討、緑陰トーク役割分担、24年度体制他。
- 6月22日 第2回緑陰トーク開催(話し手:吉田明さん)。参加者14人。
- 7月18日 第4回運営委員会、参加者5人。24年度体制・部会・プロジェクト分担。法人化定款・設立趣意書検討、現場を訪ねる企画他。
- 7月27日 第3回緑陰トーク開催(話し手:山澤遙乃、山澤綾乃、高野慎太郎さん)。参加者26人。
- 8月23日 第5回運営委員会、参加者6人。緑陰トーク反省と今後。24年度体制、法人化定款・設立趣意書再確認、現場を訪ねる企画、通信検討他。
- 9月19日 第6回運営委員会、参加者7人。現場を訪ねる、法人化アンケート方法、目録進捗、次年度意見交換他。
- 9月28日 第4回緑陰トーク開催(話し手:草川幸子さん)。参加者29人。

## 会員数(2024年9月)

175(正会員63人 賛助会員106人・6団体)

## ◆新規入会ありがとうございました

- (正会員) 富田健司さん (賛助会員) 池谷キワ子さん 遠藤伸夫さん 加藤旭人さん 小泉初恵さん
- 原子力災害考証館 curusato

## カンパありがとうございました

(2024年6〜9月)

- 阿部静子さん 草川幸子さん 小泉初恵さん 駒田和幸さん 町村敬志さん 渡邊康弘さん

## 会員の声

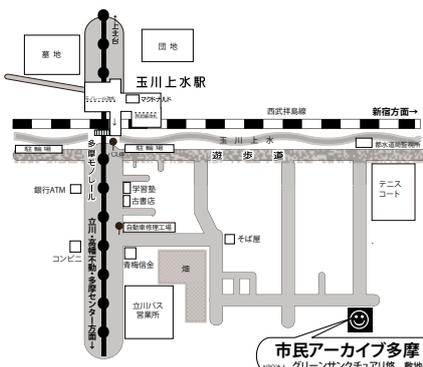
10周年、おめでとう、そして有難うございます。ミニコミ誌を中心に、人と人をつなげてきた確実な営みを感じ、うれしく思います。市立図書館に寄りました「アーカイブ通信」が今までの下で横になっていたので、上の段で横に置いてあり、一面がバッチリ見えるように置いてありました。総会議案が素晴らしい内容で勉強になりました。NPO法人化のメリット・デメリットが理解出来ました。次の10年を見据えた活動で正会員・賛助会員の抱負や「自分はこの先が出来る」などを書いてもらってはとうとう。また、企業・団体からの賛助金や寄付金を求めています。

・ニュースの編集やチラシ作成などの内容も編集技術もすばらしい。

## 編集後記

NPO法人化を進めるにあたって他団体の定款や設立趣意書を調査してみると、各団体がいろんな想いの元に設立してきたことを実感。当会でも多くの方の想いを形にしたいところ。

(江・鈴・吉・増)



## 市民アーカイブ多摩利用案内

- ・開館日：毎週水曜日、第2・4土曜日(年末年始・8月中旬休館有)
- ・開館時間：午後1時〜4時 ・入館カンパ：100円〜
- ・所在地：〒190-0002 東京都立川市幸町5-9-6-7 (多摩モノレール、西武拝島線「玉川上水駅」南口徒歩8分)
- ・tel・fax：042-536-5535 (電話は開館中のみ)
- ・見られる資料：市民団体や個人が発行するミニコミ(通信や会報等)
- ◆会員・カンパ募集中 ~市民の活動を過去・現在・未来につないでください~
- ・正会員1口6,000円/年 ・賛助会員1口3,000円/年 ※団体会員2口〜
- ゆうちょ銀行 振替口座00120-9-729226 口座名：市民アーカイブ
- ※他銀行から ○一九(ゼロイチキュウ)店(019)当座 0729226